

---

# 高校生回顧録

エナカ ユイリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高校生回顧録

### 【Zコード】

Z2242BA

### 【作者名】

エナカ コイリ

### 【あらすじ】

奥村飛鳥。独身、玩具会社社員。彼はある日、母校が廃校になると同級生から聞かされた。そして彼は高校時代を振り返り、今の自分を見つめ直す。

俺、高校時代のあだ名『復刻大臣』にかけて最後の仕事をします。

第一話

母校が廃校になる。と俺と同じく高校の近くに住んでいる宮地大  
から聞かされた。

「一つ向こうの駅の近くにある高校と合併するらしい。たまたま口  
ソビーで会ったからヤツに聞いても実感が無い。もちろん、驚いた。  
俺の一番思い出深い場所の役目が終わるのだから。けれど廃校まで  
あと一年もあるといつ。

そういえば、十年ぐらい高校に行つてないな。

俺は、来年の文化祭は一緒に行こうと宮地に言つて帰つた。  
あの頃、何に熱中していただろう。何が流行つていただろう。そ  
う帰る道中車内で思い出す。

夏休みが終わり、二学期が始まろうとしていた。生徒の気は緩み、頭の色や耳にピアスなど夏休み前と様子が変わっている者が多数いる。

部。 奥村飛鳥。 名前の割に男。 十六歳。 海里ヶ丘高校一年二組。 帰宅

得意なこと無し。親友と呼べる人一名。最近ハマっているモノ、古いモノ。

皆、彼を『復刻大臣』と呼ぶ。

「大臣おはよ」

飛鳥に声をかけたのは、親友その一の富地。遅刻、ギリギリで始業式の会場、体育館へ向かつて走っている。

「おい富地、間に合うのか？」

「大臣、お前も歩いていないで急げよ」  
「確かに」

一人は走つてクラスの列に入る。  
もつと時間に余裕を持つて来いとクラスの整列の責任者、評議委員に軽く怒られた。

お昼頃、下校。

部活のある者は即座に部室へ。

富地は飛鳥に別れを告げて男子テニス部の部室へ行く。

「男テニ、明後日休みだから遊ぼうなー」

とも言つていた。

「俺がバイトだから無理だわ～」  
「マジか…」

落ち込む富地の背中は寂しかった。

「二人とも忙しそうで。大臣、帰るよ

そして今、飛鳥に声をかけたのが親友その二、林田慶輔。はやしだけいすけ通称、リングダ。学年の中ではかなりのイケメン。いつも冷静だが、時々尖った態度に豹変する。

「おう」

「今日、ステップの発売日だから立ち読みしに行こうよ」「そうだな。先週のツーピースやばかつたよな?」

古いモノオタクの俺、運動バカ富地、トンガリキャラのリングダの三人組。これが俺たちにとつてのいつものメンバーだった。

この頃、あんな複雑な関係になつてしまつとは思わなかつた。それは文化祭前、俺が彼女と別れてから始まつた。

## 第一話

「「めんね、でもこれからも仲良くしてね」

俺は彼女のその言葉を聞き、自分で中で何かが壊れるような衝動に陥った。

今でも覚えている。

たしか、放課後の図書室でだった。

「おい、なんだよそれ！」

静かな図書室に飛鳥の声が響き渡る。

「五月蠅い。まだ人生長いんだから私よりも合づ人に出会えるよ」

それ以上何も言わず去る彼女の背中見ながら持っていた本を机に乱暴に叩きつけた。

打撃音は悲しい余韻を残すだけ。

スクールバッグ片手に飛鳥は、とぼとぼ図書室から出ていく。

小学校の時の初恋の彼女に高校入ってから告白しじて、付き合つて、デートして……

早い三ヶ月だったと飛鳥は思い返す。あっさり別れすぎて未練がありすぎる飛鳥。

「ミミ箱の前で財布の中のプリクラを捨てよつとするが捨てられない。

「どうしたん？」

時々訛る口調が特徴のリンダが飛鳥の顔を心配そうに覗き見る。

「どうしただつて？それはアイツに言つてくれよ」

弱々しく答える。

「あつ、俺な傘忘れたから取り来たんだ」

お前がここにいる理由はどうでもいい。  
話しかけてから聞かでちやんと聞け！

飛鳥はそう思いつつも放つておへ。

「でアイツって？何があつたかちやんと説明してみ

とりあえず彼女と別れたとだけ言つ。それ以上の説明はなにも  
ない。

「ホントかそれ

「本当だよ」

「えー、結構お似合いだと思つたんだぜ

「だから口クられた時、断つたのか？」

リンダはかつて飛鳥の元彼女に告白されたことがあつた。その  
時はあつさつと断つたと飛鳥は聞いていた。

「違う。だつて白石だ。今まで何人と付き合つて噂があつ  
たことか。そんな口口口口変えるやつとなんて絶好無理だね」

「……」

「そんな落ち込むなよ。復刻さん顔は普通だし、身長あるし。見た

「田にまだ問題無いからいつかはモテキが来るよ」

「そりかな」

「アリ」

飛鳥はプリクラを握り潰して捨てた。  
彼女と決別するために。

「これで俺と田石は元通りの友達だ」

富地は部活の練習中、後輩の沖おきとテニスコートの自転車置き場で失くしたボールを探している。黄色くて田立つはずなのに、自転車の下を見ても見つからない。

「おかしいな……」

「先輩、もしかして俺たち間違ったといひがします?」

「いや、そんなはずはない! 沖くーん、そっち探しといて

「分かりました」

おかしいなと独り言を言いつつ、探し続ける富地に誰かが声をかけてきた。

「マサ、これ」

振り返ると幼稚園からの幼馴染。

「彩ちゃん、ありがと。今帰るとこがへ。」

「うん」

「一人?」

「まあ、いろいろとね」

彼女は、白石彩。

リンダに断られ、飛鳥と付き合い別れた宮地の幼馴染。

白石はバイバイと言つて帰つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2242ba/>

---

高校生回顧録

2012年1月14日19時50分発行